

ふるさと上越市の滝

大綱目野 藤沢勝一郎（東本町四丁目出身）

平成十七年一月一日の平成の大合併に

より、上越市は分水嶺となる長野県境にも接することになり、全国第十六位の面積を持つ広域な「ふるさと」になった。

ふるさとの主な河川としては、関川、保倉川、名立川、桑取川、柿崎川の五川で、海岸から二十五kmで、一〇〇m級（関田山脈、二十kmで、一、四〇〇m級（中郷区の不動山）の山に達する。

国土地理院発行の二万五千分の一地図（以下「地図」という）中にある滝記号は七つ。

滝の数は思っていたほど多くなかった。しかし、大島区菖蒲高原にある大滝、小滝のように落差が大きく、見事なものや小なりといえども豪快さ、清楚さ、幽邃さなど風格をもって溪間、樹間にその姿を見せているものもある。滝記号のない溪にも立派な滝があり、地元民や愛好者に

親しまれている。

ただ、見に行くには不便な滝もあり、車を使い、山道を歩き、川を遡り、季節によっては敷漕ぎをしたり、熊除けの鈴（出来るだけ大きな音の出るもの）や携帯ラジオ（谷部へ入ると音が出なくなる）こと有り持参等対策が必要になる所もある。また、スズメ蜂初夏から秋にも気を付けなければならぬ。

今回紹介するのは、三年ほど前から「ふるさと上越ネットワーク（略称Jネット）」（事務局：上越市企画地域振興部 企画政策課）が春と秋に実施する「ふるさと交流会」や法事・お盆等で上越市へ帰省した時に、市立図書館で調べたり、地図を基に現地に行き、話を聞いたり写真を撮ったものである。

滝の落差については、町史・村史等に記載が無かったり、公的機関でも不明で

あったため、ほとんどは目測によった。また、滝名が不明であったものについては、仮称とした。

滝を見に行くに当たっては、天候や道路事情、滝周辺状況（熊など）、水量、自身の体力等を十分に考慮願いたい。

平成五年七月、当時の新井市で地図に記されていない落差三十一・四十mの滝、十本が市民グループによって見つけられたと報じられたこともあるのだから、上越市域にももっとあつていいはずである。

一、大滝、小滝（大島区）

保倉川は、大島区と長野県境の野々海峠近くを源流としており、大島区菖蒲高原の駐車場のある滝見台からは、二つの大きな滝を同時に見ることができ、距離が五〇〇m程あるため滝音は聞こえない。向かって右が大滝、左が小滝である。大滝は落差五十mで一段の滝、その上にも五m位の小さな滝が見える。

小滝は三段で落差七十m、今回訪れた滝の中では一番落差がある。三段目からは、落差五十m。大滝と並んで二本の白い布が垂れ下がっているように見える。

二つの滝は、いずれも源流部近くにある流域も広くないが故に、梅雨や雪解けの時期と夏の渇水期とは、水量も随分と違ふ。

ゴールデンウィークの雪解けの頃は、

水量も多く眺めは豪快で、山肌の萌黄色の木々とその中に咲く桜の花との素晴らしい景色を見ることが出来る。しかし、渇水期の八月には、そうめんのように細くなってしまう。

菖蒲高原の滝見台へは、国道四〇五号沿いの菖蒲東集落から、堀切川沿いの道が保倉川沿いの県道三四八号を通って、車で容易に行ける。

菖蒲高原には、管理棟を兼ねたベルハウス、コテージ（台所、水洗トイレ、浴室等が整備）やキャンプ場もあり、グループや家族で楽しむことが出来る。



二、保倉滝第X(仮称)、第一、第二、第三(大島区)

この滝は、葛蒲高原滝見台から見るこ
とが出来ないので、葛蒲高原下の広城基
幹林道菱ヶ岳線の、葛蒲橋から保倉川を
遡ることとした。

川へは、橋のすぐ近くの砂防ダムから
降りる。八月は渇水期でもあり、水量は少
ない。

ヘルメットをかぶり、地下足袋を履き、
熊避けのため両腰に大きな鈴と携帯用蚊
取り線香をぶら下げ、妻と義母が心配し
て持たせてくれた長さ九十m程のステン
レスパイプで石をたたきながら、石ころ
だらけの川を歩き始める。珍妙な格好だ。
十五分で最初の分岐となり、左は大滝、小
滝へ通じる溪である。

更に三十分ほど遡行すると再び分岐と
なり、左の溪を一〇〇m行つた所に保倉
滝第Xがある。

この滝は落差七m、水量は少ない。滝つ
ぼの深さは一m。水はとてもきれいだ。

滝の上へ行こうとしたが、足場の確保
が難しく、巻き道も見つからない。

「地図での滝記号は、分岐から二五〇m
ほどの所なので、一〇〇mとは近すぎる」
と思いつつここから引き返さざるを得な
くなった。

砂防ダムまであと二〇〇mほどという
所まで引き返した時、二三十m先の草む

らの中から突然に灰茶色がかつた動物。
一瞬「・・・クマ?・・・」凍りついた。

よく見たらツノがある。カモシカ
だった。相手もびびくりしたろうが、こっ
ちもびびくりした。ここで遭えるなんて
ラッキー!しかし、そうとばかりも言え
ない。高原周辺には「クマ注意」の看板が
いくつも建ててあったのだ。

車で葛蒲高原を野々海岸の方へ進み、
途中から双眼鏡で見たら地図どおり分岐
から二五〇mの所の滝が見えるかも知れ
ないと思いつつ、オートキャンプ場手前
の林道から覗いた。在った、しかも三つ。
地図の滝記号は一つ。複数の滝をひとま
とめにしちゃったのかなあ。

しかし、三倍ズームのデジカメで撮る
には、無理な距離であつた。

上流部から下流部に向かい保倉滝第一、
第二、第三と仮称した。それぞれの落差は、
十m、五m、十五m。いずれも水流はそう
めんクラスで細い。第三と第Xの間に滝
が無ければ、第Xは第四になる。

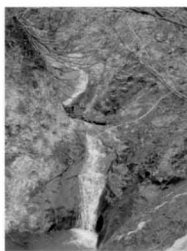


しかし、この三つの滝は、引き返した分
岐を更に遡行した溪に在るのかも知れな
い。

三、大島滝(仮称)(大島区)

葛蒲高原下の広城基幹林道菱ヶ岳線の
「葛蒲橋」から、葛蒲東集落へ向かつて舗
装された細い道沿いを〇・八kmほど進む
と保倉川へ流れ込む支流がある。

この滝は、支流と交差した林道の直ぐ
右山側に、左カーブしながら川底を舐め
るようにして流れ落ちる二段、落差十m
ほどの滝で、地図には記載されていない。
夏場は、木々や草に半ば覆われており、
道路際に草が繁茂していたらうっかりす
ると見逃してしまいうのである。水量が
多いとは言えないが、楚々としたこの滝
は、幅二m、長さ三m、深さ一mほどの滝
つぼを持っている。



山温泉の中間あたりから、田麦川沿いの
県道一三号を約二・五km進み、県道七八号
と交わる所近くに板山不動尊の駐車場が
ある。駐車場脇を下り、木の橋を渡り、杉
木立の屋敷の奥薄暗い川沿いの道を五分ほ
ど歩くと間口三十m、奥行十三m、高さ一
八mの半月形水成岩洞窟がある。洞窟内
には、不動尊が祀られ二百数十体の石仏
が安置されている。

滝は洞窟のすぐ右側にあり、落差五m、
堂々としている。夏場でも水量は、春先と
同じ位にあった。滝下の川は浅く水もき
れいで、子供達が水遊びするにはもって
こいといった感じである。

不動尊は、昭和四十九年九月、当時の大
島村指定文化財第二号として登録されて
いる。

不動明王が、目の病に霊験あらたかだ
であることが遠近に知れ渡り、かつては、老
若男女の参詣が絶えず、奉納相撲や芝居
もあつて賑わっていたとのことであるが、
現在は実に静寂である。参道には、現在の
若い人はあまり知らないだろうが、田中
彰治元代議士名が刻まれた苔むした休憩
所碑もあった。

四、板山不動の滝(大島区)

国道二五三号沿いにある細越集落と大

伝説によれば、この不動尊は、衆生済度
のため諸国を遍歴していた役行者が、こ
の近くの小海の池のほとりを通ると金色
燦然と輝く不動明王が現れ、ここから北
へ少し行くと非常に珍しい岩屋がある。

吾をそこへ安置せよ。」とお告げを受け、この地に不動明王の像をお迎えし、一寺を建立してこの地を霊場としたのが始まりだという。

ここから四〇〇mほど離れた所にある小海の池は、水面一八、〇〇〇㎡の自然の池で、底なし、主が棲むとも言われている。

駐車場の前

や川辺には「大島わき水十選」の一つに選定されている清冽で、夏でも冷たい湧き水があり、のどを潤すことが出来る。



五、いすずくらの滝(安塚区)

滝は、国道四〇五号沿い船倉川の樽田集落と下船倉集落の中ほどにあり、落差十五m、樽田層火山角礫岩の一段の滝で、轟音を立てて流れ落ちる。周囲が開けているせいか開放的な感じがする。国道脇に安塚八景④ いすずくらの滝の看板があり、車二、三台が駐車できるスペースがある。ここから滝のほぼ全景を見ることができ、水量は比較的多く、堂々として流れる。

樽田川の入り口に、いすずくらと呼ばれる所がある。急な崖で、地層を見ると石臼を横から見た形に似ているので名付けられ、石臼倉いしうすくらが訛って「いすずくら」となったものであろうとのことである。滝の名前は、ここから名付けられたものである。

ちなみに「倉」とは、崖、岩場を意味する。区内には次に紹介する「滝の倉も同じ意味で使われており、谷川岳の一の倉や千の倉などがある。また、品く」と書くこともある。この畠の付いた山には、尾瀬国立公園にある燧ヶ岳の俎品(まないたくら)、柴安品(しばやすくら)があり、岩場である。



六、滝の倉(安塚区)

国道四〇五号沿いの「景勝 水の源 切越」と書かれた看板の所から、朴ノ木川沿いの切越集落に入り、切越戸沢線の「切越橋」を渡ってすぐ右の舗装された細い山道を五分ほど歩くと、右手眼下の川に



岩が階段状になっているのが見える。

滝下へは、ここから急な斜面を三分ほど下れば行くこともできるが、夏場は一面に草が繁茂していて困難である。滝は、朴ノ木川ダム直下にあるため減水区間すらなく、岩が階段状に連なっているだけ、滝とは思えないのが残念である。

しかし、降雨等により溢水したりダム放水された時には、落差二十m、勾配十五度を一気に流れ落ちる見ごたえのある階段滝に変身すると思われた。

滝下の川に流れ込む湧き水は、澄んでいてとてもきれいだ。地元の方の話によれば、ダムが出来た以前の川は、水がきれいで泳ぎも出来たし、ニジマスもたくさん捕れたが今はない。最近では、ようやくハヤ(ウグイ)が捕れるようになるまで水質が回復したとのことである。

車は、集落内を直進して安塚町簡易水道浄水場の駐車場に置くことが出来る。この浄水場から橋までは、歩いても五分ほどである。細い山道は、車のすれ違いが出

来ないし、Uターンする場所もあまりない。また、舗装表面が粘土質の土で薄く覆われているため、スリッパしやすしい。

七、不動滝、菱ヶ滝(仮称)(安塚区)

両滝とも菱ヶ岳(二一九〇m)直下の小黒川源流部にある。不動滝は二段になっていて、落差三十m。夏場でも春先と変わらないほど水量は豊富で、轟音を立てて流れ落ちている。菱ヶ滝は落差十m、大きな岩石表面を流れ落ちる一段の滝であるが、水量は少ない。

国道四〇三号沿いのゆきだるま温泉、キユービットバレイススキー場から六kmほど長野県境の伏野峠に向けて進むと「不動滝 歩いて十五分、足元に注意して下さい」という標識の建っている十台ほどの駐車スペースの有る広場に出る。このあたりは、菱ヶ岳自然観察教育林、水源かん養保安林(俎倉まないたくら)国有林)になっており、ブナの巨木が沢山ある。

菱ヶ滝は、ここから樹林の中、急坂数箇所に設けられたロープに捕まりながら十分ほど降りて行くと、右側に見える。足元が崖の上なので注意を要する。

更に五分ほど下ると、草が生い茂り、ブナの巨木が目につく台地状の広場になる。ここから、樹林越しに轟音を立てて流れ落ちる不動滝が見える。道がないので苦労するが、滝下へも行くことができる。

滝のそばや周辺には、マグマが上昇して地表に出ずに固まった火災石と呼ばれる珍しい貫入岩体があり、地図にも記載されている。

不動滝の上流部川岸には垂炭層を挟む軽石質の凝灰岩層が露出していて、この凝灰岩層には、径一㎢くらいのガーネットが含まれているとのことだ。



八、高谷大滝(弁慶滝)(牧区)

国道四〇五号沿いの牧区高谷集落から浦川原区に入る少し手前、道路すぐ右側にある落差十m、上部が四段になっている滝で、弁慶滝とも名付けられている。

降雨時や雪解け時以外の水量は、少ない。

地元の方の話によれば、数十年前までは単に大滝と呼んでおり、その頃はもっと水量も落差もあり、滝つぼの深さも一mはあった。しかし、土砂崩れと国道改修により、滝つぼは埋められ、路面も二mは高くなって現在のようになった。また、水

源は滝上流のきれいな湧水であったが、そこも土砂崩れで埋まってしまい、湧水量も少なくなってしまうとのことである。

別名である弁慶滝の由来については、滝壁の下から上まで馬の蹄ほどの穴が直線的に付いており、それは「弁慶が馬に乗って駆け上がった時に出来た穴」と言われていたことから、五年ほど前に地元の方々が名付けたもので、滝の標識はその時建てられたものである。

—そうすると、義経このあたりを通ったのかある。



九、荒沢不動の滝(浦川原区)

ほくほく線浦川原駅近くから県道六一号に入り約一・五km、県道沿いにある「荒沢不動尊」の案内標識に従って上岡集落の一本道を進むこと約三km。両側に田んぼが広がっている。

不動尊入り口に平成八年に関川姫川水百選選定委員会・建設省高田工事事務所によって選定されたという「荒沢不動尊

と滝」の銘板が埋め込まれた大きな石がある。この奥の不動堂の横を進むと不動尊と滝がある。

ここは、上岡集落にそそぐ猿俣川の上流水源地で県指定自然公園雁金山の麓。

滝は、断崖から流れ落ち落差七m。水量こそ少ないがきれいな水だ。周囲が太いケヤキなどの樹木に囲まれているため、静寂で少々薄暗い。滝の傍らの断崖には、半円状の三・四mの岩窟が掘られ、江戸時代の作である石造不動明王が祀られている。また、滝の横断崖に穿かれた石龜せきがんに納められた石造不動は、室町時代の作であり、苔むして歴史を感じさせる。

この不動尊は、災難・病魔退散・厄除け不動として、地元・頸北地方の人々の信仰を集めているという。



十、清滝(清里区)

梨平峠直下の清滝川源流部にある滝で、頭部がY字形になった三段、落差二十m

で流れ落ちる。水量は豊富で、滝の上がV字形に開けているため、開放的な感じがする。上越市にはこの名の清酒もある。

滝へは、県道一九八号を通り清里区梨平集落または赤池集落、あるいは国道四〇五号を通り牧区府殿集落から道路の行き止まり近くまで行く。行き止まりには「新潟県上越林業事務所 水工工 平成十年度」の銘板のある砂防ダムがあり、その手前三〇〇mほどの所に車三台ほど駐車できるスペースがある。

ここから草原を降り、二本の支流にかかっている鉄製足場を渡り、梨平峠への山道を十五分ほど歩くと祠のある場所へ着く。滝は、ここから展望でき、かすかに滝音が聞こえる。ただ梨平峠への山道は、夏場になると道が分からなくなるくらい草に覆われてしまうので、注意を要する。祠から更に三・一kmほど山道を行けば、ここは長野県境の梨平峠である。

